

## 1. 序文に変えて

近年、日本と中国で古鏡銘研究が激しく進捗している。日本は京都大学「中国古鏡の研究」班が2009年から2011年にかけて前漢から西晋までの鏡銘集積を5冊に纏めた。前漢から西晋までの500年間を、漢鏡一～七期、三国と晋に区分し、総数600鏡銘を取り挙げ、全ての銘文の脚韻を整理した。また、難解な鏡銘の文字一つひとつに「省字」や「繁字」、「仮借」、「古文」、「析字」、「同じ（「精明」は「清明」に同じ、と使う）」、と注釈をつけ、更に、多数の文献を引用し、詳細な解釈を施した。中国は王綱懷氏が2004年から2010年までに私蔵鏡を中心とし、氏のいう鏡友からも拓本を借用し、未公開資料や公開されることの少なかった資料を中心とした三冊の図録を公開した。図録は銘文の字形を篆・隸書も細分し、全銘文に記載している。更に、部分的ではあるが銘文を見易く拡大している。なお、2010年に論文集の『止水集』も公表した。

私は昭和60年から漢鏡銘のコンピューター入力が続けており、データ数は2万行以上になった。清朝の図録以来、同一鏡が何度も採録されており実数は5分の1から6分の1程度であろう。当時を振り返るとデスクトップが会社の部・支店に1台であった。機械はIBM5550シリーズのDOS/Vマシンで、12.5インチフロッピーをドライブに3枚入れ、5分待つてようやく画面が立ちあがる。日本語ワープロと表計算のマルチプランしかできなかった。プリンターは5577F01。プリンターリボンの時代である。使用できる漢字は第一水準だけであり、第二水準は通称「イエローブック」と呼ぶ厚さ2cmの漢字コード本を利用したコード入力だった。この頃は、入力者を囲み入力の勉強をしており第二水準のコード変換で捜している文字が画面にでると、観衆が拍手した時期でもあった。鏡銘は勤務時間外に入力するので、図録一冊入力するのに数カ月かかった。今から考えると恐ろしい程のムダと思うだろうが、楽しかった。それはコンピューターという文明の利器を使用すること、また、入力は横書であり、鏡銘は類型銘が多く、破損や錆の不明文字□が上下関係から推定できたからである。90年代にウインドウズが導入され、一人一台のパソコンの時代になると、インターネット（以下「ネット」と略す）が利用でき、林素晴氏の『漢代鏡銘集録』を知った。また、古美術商もネットで商品広告していた。この当時、商品としてネットに流れた三つの興未ある銘文を掲示しておこう。1. 方格規矩鏡で銘文「I（銘文の形は最後に記載）」で鈕座銘に「大宜子孫」がある。（九州の古美術商）2. 福岡県平原出土鏡と同じ「陶氏作竟真大好・・・」銘の方格規矩鏡。3. 環状乳神獸鏡銘で「惟此明鏡、煥竝照明。本出吳郡、張氏元需。百練于辟、永刻文章。左龍右虎、招福除羌。宜巨相卿。朱鳥鳳皇、百精竝存。其師命長（修正した）」（関東の古美術商売）である。また、編者は古鏡の蒐集もしており、購入依頼のあった珍しい二つの鏡と銘。七連弧文鏡「龍氏作竟佳且明、采取善同出丹楊、和巳銀錫清且明、神師刻之成文章、服之竟兮」。七つの連弧文で龍氏が「神師」と自称した銘文である。この他に直銘文獸首鏡(双頭龍文鏡の古手)と呼ぶべき鏡で直銘の横、左上と右下の二か所に獸首面（正面向。反対位置にあるのは龍首の横顔二か所）があり、下“君宜官”、

上逆“官（二字不明）”があったが価格の折り合いがつかず購入を見送った。

さて、この30年間、鏡銘を入力してきたが実は、漢文は全く理解出来ないし、中国古鏡への関心もなかった。その私が鏡銘入力をはじめたのは学生時代に、中世城郭の発掘や陶磁器の指導を受けていた、根津美術館学芸部長だった故奥田直栄先生の指示である。今でも理由を覚えている。「君は目が悪いから（鑑識眼がない）陶磁器研究を止めたまえ。会社員だからコンピューターの操作はできるだろう？中国の銘文を研究したまえ」だった。同時に課題を与えられた。書物名は忘れたが「美術館所蔵と高野山本とに内容の違いがあるがコンピューターでその差を教えてくれたまえ」だった。1年以上かかって入力し、両者を比較すると確かに違いがあった。この方法（上下の銘文、文字を比べるだけ）は今でも私なりの鏡銘検討に生きている。鏡銘を集めて七言句の初句の後三字「甚大好（工）」を探すと、これは三角縁神獣鏡銘の特徴であるが一部の方格規矩鏡銘にもあり、三世紀の華北鏡銘の特徴と言いきれる。現状でも「甚大好（工）」を持つ銘文は華南で一面の出土報告もない。また、2014年は三角縁神獣鏡の長銘に「上有神守」と「上有戯守」と書き分けるグループのあることがわかり、「神守」と「戯守」の違いは他の要素を含めると製作時期差であろうと考えている。しかも、同一鏡工が使い分けをしていることから、三角縁神獣鏡は連続生産ではないと考えた。

このように銘文を集めて比較すると、その銘文や銘句使用の特性が判明することもある。鏡銘の文字使用法は冒頭に記載したように京都大学古鏡研究班が通常以外の文字使用について上記のように整理したが、この他にも鏡銘独自で多くの文字が「鏡字（鋳型で反転する）」であり、更に鏡銘の大半に「脱字」がある。鏡工の「誤字」や「記号化文字」など様々な文字の相違から、類似した銘文で長銘の同一銘や類似銘は同型関係を疑うことができる格好の資料という側面もある。

私的用途で作成していた銘文集成を今回は文献別の鏡銘一覧とし、今回約六千データを集成した。これを「漢三国西晋鏡銘集成」として公開する。また、今後はチェック終了したものから公開する予定である。

さて、中国古鏡は『宣和博古図』など宮廷銅器の筆書に始まり、清朝では拓本を中心とした宮廷蔵鏡と個人蔵鏡が多数公開された。1960年代以降、新中国の発掘調査で「清理簡報」として公表され、その後、地方の博物館に入り、他の館蔵鏡と共に再度、図録で公表される。現在、続々と公開しており、このため同一鏡が繰り返し現れる。清朝の固人図録も多くは他人からの借り入れ（拓本か）ており同一鏡が何度も現れる。今世紀は日中共に個人蔵鏡が続々と図録化されている。その特徴は図像や銘文等、従来にないか、稀なものが多い。銘文集成を作成・公開するのは、古鏡は古美術品としての性格があり、一度公開されても、その後、追及できなくなった鏡が多く、公開された時点で採録するのが大きな目的である。また、古鏡は様々な形で公開されるが、網羅するのが難しくなっており、探す時間の手間を省くのも目的の一つである。古鏡は通常、図録で公開される。90年代以降、早稲田大学、東京大学や大学以外の多数の法人がネットで公開している。古美術商のネット利用は上記し

た。古美術商の鏡と良く似た性格でオークションがあり、日中でオークションは多数あり（中国嘉徳、北京保利、東京中央など）図録化し、更にネットで公開している。日本はネットだけのオークションもある。これらは性格上、資料として網羅しにくい。東洋文庫はネットで梅原末治氏の考古資料を公開している。先ほど紹介した楽浪出土の直銘文獸首鏡は003B-0362-913である。これは楽浪の「鏡鑑」（一部に漁隱洞出土鏡がある）の写真・拓本・図、銘文解読四点セットあるが、全部がセットになっているものは少ない。銘文紹介だけの資料もあるが、梅原氏の資料は重要であり、データベース化している。先に触れたネットの『漢代鏡銘集録』もデータベース化が終了している。なお、今回の鏡銘公開に編者蔵鏡で未公開鏡を追加で記載した。

これは30年間入力してきた私的なデータベースを見直し、統一呼称と、m値（1平方cm当たりの重さ）、出土地か所有者を追加した。この集成の作業分担は基本的に編者である林裕己がエクセル入力した資料を利用した（歴史民俗博物館の入力は除く）。なお、今回の文字使用については環境適用文字を利用し、無い文字については作字せず、横浜ユーラシア文化館で銘文のチェック時に文字説明を加えた。チェック後、林がエクセルからワード変換した。

末筆ですが、かつて資料を提供してくれた岡村秀典氏、車崎正彦氏、森下章司氏に感謝します。